

目次

論文

西アジア都市形成期の土器焼成技術

—分析方法の提案と焼成温度・彩文顔料の考察—

小泉 龍人 1

エジプト中王国時代のミニチュア土器使用に見られる「単位」について

矢澤 健 23

研究ノート

骨角器インダストリーに見る新石器化の一側面

—技術選択と原材料からの検討—

新井 才二 47

資料紹介

初期イスラーム時代のファイユーム陶器

—ベナキ博物館所蔵資料から—

長谷川 奏 57

動向

アルメニアの文化遺産分野における日本の国際協力

有村 誠・藤井 純夫 61

紀元前5千年紀イランをテーマとした国際ワークショップ

三木 健裕 69

イラン、テヘラン大学で開催された「若手考古学者国際会議」に参加して

安倍 雅史・三木 健裕 75

米国オリエント学会 2013 年大会

近藤 康久 79

報告

日本西アジア考古学会 2012 年度ワークショップ A「西アジア青銅器時代の葬制」報告

久米 正吾 83

西アジア考古学関連学術論文・出版物

87

西アジア発掘調査報告会報告一覧・調査彙報

93

投稿規定・執筆要項

95

編集後記

紀元前5千年紀イランをテーマとした国際ワークショップ

三木 健裕

A Review of the International Workshop, "A New Look at Old Routes in Western Asia: Rethinking Iran in the 5th Millennium"

Takehiro MIKI

キーワード：国際ワークショップ、紀元前5千年紀、イラン、土器、移動牧畜民仮説

Key-words: international workshop, 5th millennium BC, Iran, pottery, mobile pastoralist hypothesis

はじめに

国際ワークショップ「西アジアにおける古き道への新視点—紀元前5千年紀のイランを再考する— (A New Look at Old Routes in Western Asia: Rethinking Iran in the 5th millennium)」はドイツ考古学研究所のB. ヘルヴィング (Helwing) 氏、テュービンゲン大学大学院生のM. カラミ (Karami) 氏、そしてケンブリッジ大学大学院生のH. テイラー (Taylor) 氏がオーガナイザーとなって、2013年5月31日から6月2日にかけての3日間、ドイツ連邦共和国ベルリンで開催された。このワークショップの本題はイラン遺跡サーヴェイの先駆者オーレル・スタイン (Sir Aurel Stein) の報告書 *Old Routes of Western Iran* (Stein 1940) を念頭に置いたもので、彼の調査旅行の舞台となったイランを新たに見直すということを表している。そして副題が説明しているように、紀元前5千年紀、すなわち銅石器時代のイランに関する研究発表を一同に会することを意図して企画された。

西アジア地域の銅石器時代及びそれに先立つ後期新石器時代を対象とした国際会議は、以前から幾度となく開催されており、本学会会員によって報告がなされてきた (西秋 2000; 小泉 2008; 小高 2013)。西アジア地域の前5千年紀は、西秋 (2000: 182) が国際会議の報告において指摘するように、「技術においても社会においても前後の時代の移行期にあたり、」「この時期の社会はつかみどころがない」。その中で「土器の文様には複雑なメッセージが象徴されていて、それを理解し共有することで社会の仕組みが保たれていた」(同 2000: 183) といった見通しがおぼろげながら描かれてきていた。

一方イランを中心に据え、前5千年紀のみに焦点を当てたシンポジウムは、今まで開催されたことがなかった。イランを中心とした通史的なシンポジウムに関しては、F. ホール (Hole) 氏がオーガナイザーとなって1977年に開

催された、「イラン西部におけるセトルメントパターンと文化の発展」と題するシンポジウムが挙げられる (Hole 1987)。また2005年、イラン南西部ボラギ溪谷ではダム建設に伴い、緊急調査が外国の調査隊に開放され、イランとの共同調査が実施された。それを受けて2006年、その成果を披露した通史的なシンポジウムがイランで開催された (常木 2007)。この会議には今回のオーガナイザーの一人、ヘルヴィング氏も参加しており、今回の国際ワークショップが開催される上で重要な契機の一つであったといえる。

以上、今回のワークショップは、これまでの国際会議やシンポジウムを基礎として、前5千年紀イランを研究する考古学者間の情報の交換と共有の場を設けるために開かれた。主催者たちは前5千年紀イランの研究の現状に関して、三点の問題を指摘する。(1) 前5千年紀のイランは西アジアの他地域と比べ、今まで議論に取り上げられる機会が少なかった。(2) イランは広大な土地を占め、さらにイランの中には多様な環境が見られる。そのためイランにおける考古学的文化の多様性・共通性を理解するためには、イラン内各地域を研究する考古学者が集まり、議論することが必要とされるが、今までそのような機会がなかった。(3) 先述のボラギ溪谷考古学緊急調査に代表されるように、近年イランにおける考古学調査が再び活性化すると共に新資料が蓄積され、その成果を発表・議論していく必要があった。

このシンポジウムはまさに筆者が研究対象としている時期・地域を開催テーマとしていたため、筆者にとっては非常に幸運に恵まれたといえる。3月には公式ウェブサイト (<http://5thmillenniumiran.com/>) が公開され、5月中旬には発表者とスケジュールが公開された。

ワークショップ詳細

開催地ベルリンはドイツの首都とはいえ、街のあちこちに樹木の生い茂った公園が見られる。古い街並みも多く残り、こぢんまりとした都市という印象である。ベルリンの中心部ツォー駅から電車で20分程の距離の閑静な場所、ダーレムに会場となったベルリン自由大学がある。ベルリン自由大学は1948年、それまでベルリンを代表する総合大学であったフンボルト大学がベルリン分割により東ベルリンに位置することになったため、西ベルリンに新たに創立された総合大学である。ドイツにおいて現在主要な研究大学の一つであり、創立当初から古代近東考古学研究所が設置された。今回のシンポジウムの発表者の一人であるR. ベルンベック (Bernbeck) 氏とS. ポロック (Pollock) 氏が教授を務めており、会場提供および学生による手伝いの便宜が図られた。ワークショップの会場になったトポイビルディングはベルリン自由大学構内に構える建物であり、一階は会議室兼食堂、その上の階は研究室となっていた。ドイツ以外からの参加者の多くは、会場から地下鉄で10分程の場所、フェールベリナープラッツ駅にあるビジネスホテルに滞在した。ホテルのロビーにはバーが設けられており、会場以外の情報交換の場ともなった。

会議の参加者は聴講者を含めておよそ50名程であった。3~4名の欠席者を除き、発表者として名を連ねたのは35名である。その発表者の内訳は、イラン19人、ドイツ7人、イギリス4人、カナダ、フランス、イタリア、日本、アメリカ各1人である。従来の欧米で開かれる、欧米研究者主体のシンポジウムに比べて、ワークショップの対象地域であるイラン出身の研究者が大半を占めていた点が特筆に値する。今回参加した日本人は、日程が第18回日本西アジア考古学会大会と重複していたため、筆者一人だけであり残念であった。その他ドイツに留学中のイラン人留学生や、手伝いに尽力してくれたベルリン自由大学の学生たちも、シンポジウムの討論に積極的に参加していた。さらに前5千年紀イラン南西部の著名な研究者、A. アリザーデ (Alizadeh) 氏も発表はされなかったものの、司会として参加されていた。

初日にあたる5月31日から、テーマに沿った研究発表が始められた。35本の口頭発表が予定され、1日目16本、2日目8本、3日目11本の発表が行われるというプログラムが組まれた(表1)。全体は9つのセッションに分けられた。各セッションのテーマは大きく見て、イラン南西部、西部、南東部、中央高原、そして北西部といったように、主要地域毎に分けられた(図1)。だが各地域の中でもイラン南西部に関しては、研究者層の厚さから4つのセッションに細分され、研究内容の範囲がより充実したものとなった。その4つのテーマとは「研究背景の枠組みを

形作る：主題と編年 (Framing the scene: themes and chronology)」、「新たな視点と方法 (New perspectives and approaches)」、「新と旧：1930年代から現在にかけて得られた証拠 (Something old and something new: evidence from the 1930s to the present)」、「土器と植物に関して (Of pots and plants)」であった。なお発表の対象地域はほとんどがイランや中東であったが、同時代の他地域との比較対象として、A. ライングルーバー (Reingruber) 氏による、前5千年紀のルーマニアのテル遺跡における学際的な発掘の事例報告があった。一つのセッションは4本程の発表で構成され、一人当たり25分の発表時間が割り当てられた。各セッション内の発表が終了した後、20分程発表者及び聴講者による討論の時間が設けられた。討論の後にはコーヒープレイクの時間が設けられ、発表者と一対一で話し、深く議論を交わすにはちょうど良い機会となった。

研究発表に先立ち、B. ヘルヴィング氏による趣旨説明があった。ヘルヴィング氏はダレイエ・ボラギ遺跡群 (Darreh-ye Bolaghi) での調査を踏まえつつ、主に前5千年紀イラン南西部の研究史を紹介した。その紹介はこれから発表される各発表の研究背景を概略的に説明していくと共に、各発表の問題意識を統合させていこうと試みていた。そして彼女は前5千年紀イランを研究する上での問題提起をした。彼女は具体的には、編年、生業、季節性、専門化、長距離交易、社会等の研究に問題点や未解決の点があると述べた。

その後、いよいよ個別の研究発表が開始された。各発表者の表題は表1を参照して頂きたい。はじめに発表全体の傾向を述べていく。発表内容は多岐にわたるが、各発表内容を見ていくと、事例報告と資料研究報告の二種類に分類される。事例報告はある特定の研究テーマに縛られることなく、発表者自身が携わった発掘調査又は一般調査の内容、経過、成果を報告していくものであり、全発表中の約半分が事例報告に該当した。若手のイラン人研究者が発表するケースが多くみられた。彼らは海外の調査隊が入っていない地域の調査事例を発表することが多く、今回のワークショップの議論において貴重なデータと話題を提供し、ワークショップに大きく貢献した。その一方で事例報告のみに留まる報告が多く、問題点を解決する手掛かりを与えるまでに至っていない報告も多く見られたのが残念であった。

他方、資料研究報告では特定の研究テーマに沿い、一種類又はそれ以上の種類の資料を分析して前5千年紀イランの研究における問題点の解決を目指した。過去の海外調査隊が発掘した資料を再分析する事例が多く見られる。研究対象資料が限られた、イラン国外の研究者による報告が多

表1 ワークショップのプログラム (筆者作成)

SESSION 1: Framing the scene: themes and chronology		Susan Pollock	5th millenium occupation on the fringe of Khuzestan: restudying the Tappe Sohz collection
Barbara Helwing	The fifth millennium in southern Iran – themes and issues	Hamid Fahimi	Re-assessing the stratigraphic record from 5th millenium BC Tappe Sohz
Takehiro Miki	Chronology of the 5th millennium in southwest Iran: Reanalysis of the Pottery Sequence at Tall-i-Gap, Fars	SESSION 6: Go West!	
Reinhard Bernbeck	The Pottery Sequence at Rahmat Abad, Sivand Valley, Fars	Judith Tomalsky	Stone tool technologies in the 5th millennium BC
Hossein Azizi	Rahmat Abad in the 5 millennium BC, Fars.	Lily Niakan	A 5th millennium BC settlement in the Ram Hormoz plain, Khuzestan
SESSION 2: New perspectives and approaches		Jebrael Nokandeh	Settlement pattern of the Mehran Plain in 5th Millennium B.C. Based on data from 1995–1997 surveys
Mohammad Karami	A Reconsideration of the Internal Chronology of the 5th Millennium BC in southwest Iran, based on a Comparative Analysis of the Darreh-ye Bolaghi ceramics.	Ardashir Javanmardzadeh	Excavation at Choghā Ahowān, Mehrān Plain, Ilam, western Iran
Mohsen Makki / Barbara Helwing	Geoarchaeology in the Bolaghi Valley.	Lunch followed by Afternoon Guided visit to the special exhibition URUK – 5000 years megacity in the Near Eastern Museum Berlin	
Agathe Reingruber	Interdisciplinary Investigations in the Lower Danube region (Romania): Pietrele- Măgura Gorgana between 5200 and 4250 BC.	SESSION 7: From the southeast to the center	
Lloyd Weeks	Nomads in 5th Millennium BC Iran: Evidence, Questions, Approaches.	Ben Mutin	Reflection on the ancient southeastern Iranian Plateau and its implications toward a non-uniform picture of Iran in the 5th millennium BC
SESSION 3: Something old and something new: evidence from the 1930s to the present		Nasir Eskandari	Southeastern Iran during the 5th millennium BC
St John Simpson	Paul Gotch: the story of an almost forgotten early survey of the Marv Dasht (1966, 1968)	Azarmidokht Esfandiari	Excavations at Gharbalbiz, Yazd: new archaeological discoveries from the Chalcolithic period.
Helen Taylor	Fragmented landscapes: a look at regional variability in south-western Iran.	Hassan Fazeli	Society and life in the Iranian central plateau during the 5th millennium BC.
Said Ebrahimi / Mousa Zare / Alireza Abol Ahrar	Mianrud in the 5th millennium BC, Fars.	SESSION 8: Closing the gaps	
Majid Mansouri / Ali Asadi/ Helen Taylor	Fasa in the 5th millennium BC, Fars.	Massimo Vidale / Hassan Fazeli Nashli / Rahmat Abbasnejad Seresti	Beads as markers of social status in the Transitional Chalcolithic of the northern plains: matching consumption with production
SESSION 4: Of pots and plants		Monireh Mohammadi / Gholam Shirzadeh	An investigation of settlement during the Chalcolithic Period in the southwest of the Iranian Central Plateau
Susanne Kerner	The Bakun B period pottery from Tall-i-Gaud-i-Rahim, Fars.	Ghafoor Kaka / Gholam Shirzadeh	New Evidence from the Chalcolithic Period at the eastern edge of the Central Zagros, Iran
Irene Kritikopoulos	A chemical-mineralogical analyses and comparative study of 5th millennium BC pottery from three sites in Darab, Fars.	Mahnaz Sharif	Excavations at Gheshlagh Tepe in Kordestan, northwestern Iran, in the 5th millennium
Golnaz Ahadi	Southern Iran in the 5th millennium BC: a review of past and current archaeobotanical research.	Session 9: The final frontier: northwestern Iran	
Alireza Sardari	Tappeh Mehr Ali: Socio-economic change in northern Fars during the Bakun period	Akbar Abedi / Behrouz Omrani	The 5th Millennium BC in northwestern Iran: Dalma and Pisdeli once again
SESSION 5: New connections: exploring regional relationships		Sorja Kroll	Settlement patterns of the Ushnu Solduz Valley: From Hajji Firuz to Dalma
Cameron Petrie	Tol-e Nurabad and Mamasani in the 5th millenium BC	Roghayeh Rahimi	A new explanation of the Middle Chalcolithic in western Iran and its neighboring area, based on interregional interaction, material culture, and stratigraphic sequences
Philipp Drechsler	Bakun relatives across the Gulf? The Dosariya project	Final Plenary Coffee Table Discussion: Future directions in 5th millennium Research	

い。各セッション後の討論の時間においては、資料研究報告から得られた結論に対する質問、批判、コメントが多く寄せられた。今回のシンポジウムにおいて事例報告よりも強く議論の方向性を定めていったことは疑いなく、活発な議論に大いに貢献した。だが研究対象資料の真新しさ、発掘方法や入手経路に関しての資料の信頼性という点では事例報告にまさるものではない。

次に3日間にわたる発表と議論の内容を時系列順に俯瞰していきつつ、筆者に特に興味深かった発表を紹介する。最初のセッションは編年研究と事例報告からなり、編年及びラハマタバード (Rahmat Abad) 遺跡で発見された土器工房に関して議論となった。タル・イ・ギャブ (Tall-i-Gap) 遺跡を中心に前5千年紀イラン南西部のバクーン期編年の再検討を試みた筆者の発表は賛否両論ではあった

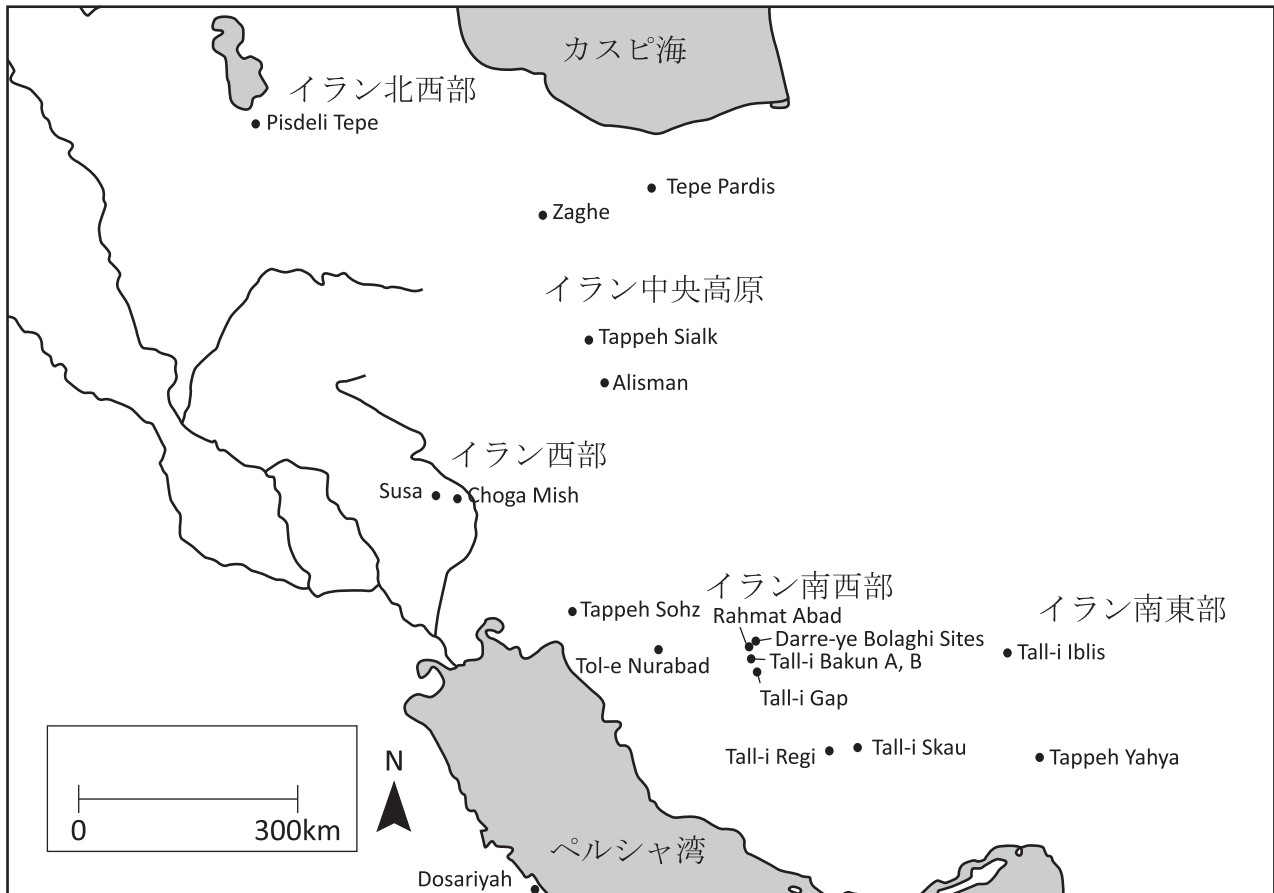


図1 紀元前5千年紀イランの代表的な遺跡 (Weeks et al. 2010 を改変)

が、バクーン期研究の第一人者アリザーデ氏から好意的なコメントを頂くことができ、筆者にとって最良の機会となった。

次の「新たな取り組み」と題されたセッションでは、M. カラミ (Karami) 氏の発表が筆者にとって印象的であった。彼は前5千年紀イラン南西部のバクーン期土器編年の空白部分に関する問題に、イラン・ドイツ合同で発掘したダレイエ・ボラギ遺跡群の発掘で出土した土器資料を用いて取り組んだ。この遺跡では住居址はなく土器焼成窯が見つまっていることから、土器工房の存在が主張されている。生産地編年を論じる上で最適の遺跡であり、その遺跡から出土した土器を層位的に論じている点が画期的であった。

その他このセッションでは、L. ウィークス (Weeks) 氏が移動牧畜民 (mobile pastoralist) に関する仮説のレビューを発表した。移動牧畜民仮説とは、前5千年紀後半イラン南西部において、移動牧畜を中心的な生業として営む人々が既に存在し、初期国家形成に向けて大きな役割を果たしたと主張する仮説である。この仮説を最初に提唱したアリザーデ氏を前に、ウィークス氏はその問題点を鋭く指摘した。発表中ウィークス氏が、アリザーデ氏がこの仮

説を証明する上で挙げた諸々の証拠を「考古詩 (archaeo-poetry)」だと痛烈に批判する点も見られた。そのように批判した上で、移動牧畜民仮説を検証するための解決案、具体的には動物考古学、植物考古学、同位体分析による季節性へのアプローチを提示した。

昼食後の3番目のセッションではイラン人研究者と英国人研究者たちが新旧資料の研究と紹介を行った。4番目の「土器と植物に関して」と題されたセッションでは、I. クリティコプーロス (Kritikopoulos) 氏の発表が印象に残った。彼女はイラン南西部、ダーラブ (Darab) 地方にある3つの前5千年紀の遺跡、タル・イ・シアー (Tall-e Siah)、タル・イ・スカウ (Tall-e Skau)、タル・イ・レギ (Tall-i Regi) 遺跡から採集された鈍黄色黒彩土器 (Black on Buff ware) に対して、偏光顕微鏡を用いた岩石学的分析と蛍光X線分析を行った。その結果、遺跡間での土器の鉱物組成、化学組成における相違と類似性から、この時代には土器が遺跡間を大きく移動しているという事実や、土器生産の専門化が進展していたことが明らかにされた。

2日目最初のセッションはC. ピートリ (Petrie) 氏から始まった。彼はイラン南西部、ママサニ (Mamasani) 地方にあるトレ・ヌラーバード (Tol-e Nurabad) 遺跡の最

新の発掘報告を行った。最新の発掘報告によるとトレ・ヌラーバード遺跡では後期土器新石器時代と銅器時代の移行期が見つかった。これによって、イラン南西部でどのように鈍黄色黒彩土器が受容されたかを解明する上で大きく貢献する可能性が期待される。

このセッションでは、イラン以外の中東地域の発表も見受けられた。P. ドレクスラー (Drechsler) 氏は、ペルシャ湾対岸のサウジアラビアにおける前5千年紀の新石器時代遺跡ドーサリーヤ (Dosariyah) 遺跡での発掘事例を報告した。この時代、鈍黄色黒彩土器の出土から湾岸中部と南メソポタミアの間の交流が知られている一方で、ペルシャ湾の対岸同士の交流の証拠は乏しい。この発表では出土した土器、石器、様々な遺物を報告する中で対岸同士の交流に関して模索していた。

次の「Go West!」と題されたセッションでは、今までのイラン南西部、ファールス地方の発表から対象地域がより西部へ、フゼスタン (Khuzestan) 地方やスシアナ (Susiana) 大平原へと徐々にシフトしていった。イラン人研究者による発掘報告や一般調査報告が中心であり、貴重な情報が提供された。その後2日目の昼食後には、ペルガモン博物館での特別展、ウルク展へのエクスカージョンが企画された。主催者側のはからいでドイツ語、英語、そしてペルシャ語のガイドが用意され、展示の詳細を案内してくれた。この特別展はウルク遺跡から出土した資料が中心に展示され、ドイツ隊による中東発掘調査の長い歴史を感じさせた。特に膨大な楔形文字文書は圧巻であった。

最終日である3日目、3つのセッションが設けられ、それぞれイラン南東部、中央高原地域、北西部という地域毎のテーマ分けとなった。H. ファゼーリー (Fazeli) 氏は前5千年紀イラン中央高原北部における社会構造を、テペ・パルディース (Tepe Pardis) 遺跡やザゲー (Zaghe) 遺跡から得られた、葬制、儀礼活動、長距離交易、工芸生産という証拠から多角的に論じた。ファゼーリー氏はこの時期のイラン中央高原北部は農業が進展し、より複雑な社会へと成長していったことは確実であると主張している。そしてその社会は、生産活動、儀礼活動など各社会的役割の中でそれぞれ頂点に立つ重要人物がみられる、ヘテラルキーの社会構造を有していた可能性があることを示唆する。

西南アジア各地のビーズ製作を研究されている M. ヴィダーレ (Vidale) 氏もこの国際ワークショップに参加されていた。氏はテペ・パルディース遺跡やザゲー遺跡の埋葬址から出土した大量のビーズを研究し、ビーズが製作された証拠がこの地域では非常に乏しいことから、長距離交易によってイラン高原の東端 (パローチスタン北部やインダス河流域上流) や西部地域 (メソポタミアとトルコ南東部の間の境界地域) から齎された可能性を示唆した。

すべての研究発表終了後、総合討論が行われた。オーガナイザーを代表してヘルヴィング氏とテイラー氏が会議の成功をお礼した。また A. アリザーデ氏が会議の総括を述べた。アリザーデ氏の総括の中で特に印象深かったのは、彼がイランを去りシカゴ大学へ留学していた頃と比べ、イラン国内の若手研究者層が非常に厚くなっていたことを嬉しそうに語っていた点である。

おわりに

今回は土器を中心としながらも、研究対象が多岐にわたる国際ワークショップとなった。今回のワークショップを全体的に見た場合、残念ながらヘルヴィング氏の冒頭の趣旨説明に沿った流れにはならなかった。ワークショップ全体における議論の焦点はあまり定まらず、建設的な議論ができたか評価できるかは難しい。各セッションのテーマが議論の方向性を与えていたものの、イラン南西部地域の各セッションのテーマは討論の際、首尾一貫したテーマとしてあまり役割を果たさなかった印象がある。しかし、史上初めてこの分野の研究者をこれだけ多く集めた点は評価されるべきである。特にイラン人研究者が国外での発表を積極的に望んでいる姿勢は、国としてのイランの対外的な姿勢と大きく異なり、予想外であった。発表の対象地域もイラン北東部を除いて、イランの主要な地域を広く扱っており、イラン全土を網羅的に論じようと試みた初のワークショップだと評価できる。今回新たな発掘調査・踏査の成果報告が全体の半分以上を占めており、新たなデータを一つ場で議論し、今後の発掘調査の方向性を定める良い機会になったと感じられた。しかしそのデータ全体を通して、現時点での前5千年紀イランの実像に関する明確な結論を得ることはできなかった。

明確な結論は得られなかったものの、筆者なりに今回得られた前5千年紀イランの実像に向けての見通しを、ヘルヴィング氏の趣旨説明の流れに沿いながら、簡潔にまとめておきたい。編年に関しては、筆者やカラミ氏の発表、それに対するアリザーデ氏等様々な研究者からのコメント、さらに年々増加してゆく放射性炭素年代測定結果から、研究者間で徐々に同意が形成されつつあるように感じられた。生業に関しては、ウィークス氏の移動牧畜民仮説に対する批判が注目に値する。だが植物考古学や動物考古学の立場からこの仮説、さらには季節性を検証しようとした発表は今回見られず、今後の課題となった。専門化に関しては、ラハマタバード遺跡やダレイエ・ボラギ遺跡群で検出された土器焼成窯の発見とその詳細な研究、また胎土分析による土器流通の実態の解明によって、土器生産の専門化の研究が今後加速していくと考えられる。長距離交易や社会に関して踏み込んだ発表は少なく、先述のヴィダーレ氏

やファゼーリ氏のみであり、このテーマをイランの各地域でもっと取り上げてもらいたいと感じた。

日本は1956年、日本初の西アジア発掘調査となったタル・イ・バクーン A、B (Tall-i Bakun A, B) 遺跡の調査以来、タル・イ・ギャブ遺跡、タル・イ・ジャリ A (Tall-i Jari A) 遺跡の調査を含めてイラン銅石器時代の遺跡を調査してきた歴史がある。しかもその内の3つの遺跡はバクーン期の標識遺跡になっており、非常に重要である。そのため日本隊の調査は、前5千年紀イランの考古学調査の歴史全体を鑑みた際に、重要な位置を占めている。だが、日本隊による何れの遺跡の発掘調査も、半世紀後の現在からみれば十分に報告されたとは言い難い。今回筆者は唯一の日本人参加者として、世界中の研究者が日本隊によるかつての調査成果の詳細な報告を待ち望んでいるのを肌で感じることができた。また今回のワークショップでは、歴代のイランでの各国調査隊による考古学調査の成果が、一つ

にまとまりつつある機運を見て取ることができた。そして今回、各国調査隊の後を継いだ代表的な考古学者たちの間で、問題意識を共有することができたことは大きな成果である。このワークショップの成果を踏まえ、更なる問題の解決に向けて、イランにおける発掘調査事例が増加していけば幸いである。なお本ワークショップの論文集が作成される予定である。最後ではあるが今回のワークショップ運営にご尽力くださった主催者ならびにドイツ考古学研究所、ベルリン自由大学の関係各位、そしてワークショップ参加にあたり機会を与えていただいただけでなく様々な便宜を図ってくださった西秋良宏先生には、深くお礼申し上げます。

参考文献

- Hole, F. (ed.) 1987 *The Archaeology of Western Iran, Settlement and Society From Prehistory to the Islamic Conquest*. Washington, D.C. Smithsonian Institution Press.
- Stein, M. A. 1940 *Old Routes of Western Iran*. New York, Greenwood Press.
- Weeks, L. R., C. A. Petrie, and D. T. Potts 2010 *Ubaid-Related-Related? The "Black-on-Buff" Ceramic Traditions of Highland Southwest Iran*. In R. A. Carter and G. Philip (eds.), *Beyond the Ubaid. Transformation and Integration in the Late Prehistoric Societies of the Middle East*, 245-276. Studies in Ancient Oriental Civilization Number 63, Chicago, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- 西秋良宏 2000「近東の紀元前5千年紀」『オリエント』44巻2号 182-185頁。
- 常木晃 2007「イラン、ボラギ溪谷考古学緊急調査シンポジウム」『西アジア考古学』8号 165-169頁。
- 小泉龍人 2008「ウバイド期に関する国際研究会」『西アジア考古学』9号 165-169頁。
- 小高敬寛 2013「西アジア後期新石器時代における土器研究の新動向—専門家ワークショップ「描かれる器・描く人」に参加して」『西アジア考古学』14号 89-94頁。



図2 ワークショップの集合写真 (Ghafoor Kaka 氏撮影)

三木 健裕
東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
Takehiro MIKI
The University of Tokyo